世界に誇る技術で、製品づくりを支える

―髙木彫刻株式会社―

職場ルポ

WORKSHOP REPORT

（文）清原れい子（写真）小山博孝

髙木彫刻株式会社
〒640-8392　和歌山県和歌山市中之島1525番地
TEL　073-423-5205　FAX　073-428-0227
URL　http://www.takagi-chokoku.co.jp

日本初の「捺染用ロール」を製造

JR和歌山駅から車で数分のところに、「高木彫刻株式会社」がある。従業員は約一〇〇名。業界では知る人ぞ知る、世界に誇るすばらしい技術をもつ「金属加工業」の会社なのだが、中間製品加工メーカーのため、製品が私たちの目に直接触れることはない。そこで、日本の技術のすばらしさを改めて思い知らされた会社紹介から。

高木彫刻では、布などの捺染用ロール、壁紙や床材、天井材などの住宅資材用ロール、お菓子や食品の型ロールなど、衣食住のさまざまなものに柄や模様をつけるロールを製造している。これらは、いわば金属加工の金型にあたるようなもので、ローラー彫刻、ロータリー製版、グラビア製版、エンボスロール彫刻などと呼ばれる。さらに高度なメッキ技術を生かして、電子部品材料であるニッケル箔なども生産している。

高木玉和社長

奥村尚武総務部長

一九二一年、現社長の祖父にあたる高木留蔵さんは高木彫刻所を設立して、捺染用のロール彫刻加工を始めた。二代目の父、高木秀夫さんが一九四八年に株式会社に、八七年に高木玉和（たまかず）さんが社長を継いだ。高木社長に、今日までの歩みをうかがった。

「祖父が会社を始めたころ、和歌山では地場産業としてリンネル産業が盛んで、布地のプリント工場がたくさんありました。祖父は日本で初めて、リンネル製品に柄模様をつけるための捺染用銅ロールの彫刻加工を始めました。当時は、色に柄がついていれば、喜ばれたのです」

原理は版画と同じで、版にあたるのがロール、紙にあたるのが生地、墨にあたるのがインク。版を円筒形にしたというイメージだ。一九六六年には、日本でこれまた初めてのロータリースクリーン製版加工を開始した。こちらは、細かな穴からインクを出して模様を印刷する。

「さまざまな技術革新を経て、衣食住のすべての分野にわたる中間製品加工メーカーとして発展してきましたが、捺染用はどんどん中国に移っていきました。いまは捺染用ロールが一五パーセント、住宅資材用ロールやお菓子の印刷の型ロール、液晶関係のコーティングロールなど、製品の八五パーセントが非繊維関連製品となっています」

コアラの模様を印刷したスナックやテーマパークのロゴを印刷したお菓子など、ロータリースクリーンの技術を応用した、食品への印刷用ロールは得意とするところ。グループ会社のニーフテックで製造するパソコンや携帯電話のリチウム電池の過電流防止用ヒューズの材料ニッケル箔も、ここだけでつくられているものだ。

「一つは一つは小さいものですが、つくっているのは世界で唯一です。ロータリースクリーンの素材はニッケルですので、ニッケルの電解工程は私どもの得意分野です」

本社工場のほかに、すぐ近くの電鋳工

場と浜松工場、台湾とアメリカ・ジョージア州にも工場がある。会社案内も日本語英語の併記で、「TAKAGI CYOKOKU」の名は、海外の業界関係者にも一流ブランドとして知られている。

「不動産やレストランとか、別業種での展開はこれまで考えてきませんでしたし、これからも私は考えていません。社名は古いイメージがしますが、高木彫刻がブランド名になっているので、なかなか変えられないんです。業績は順調にきていますね」

戦後すぐから障害者を雇用

高木彫刻では、株式会社を設立した戦後すぐから、手や足が不自由な人たち、戦争で負傷した人たち、耳が聞こえにくいという人たちが働いていた。

「父は戦争で負傷して、右目が義眼でしたから、障害者をできるだけ雇用しようという社風があったと思います。昔は、今日のように機械やコンピュータで彫るのではなく、人の手による作業でしたから、多いときは従業員も二五〇人くらいいました。このときから障害者雇用に力を入れ始めたと意識したことはないですね」

いままでに、雇用率未達成で納付金を納めたことはない。社是は、「感謝・誠実・和」。高木社長の語り口から、「家族的な社風」が伝わってくる。

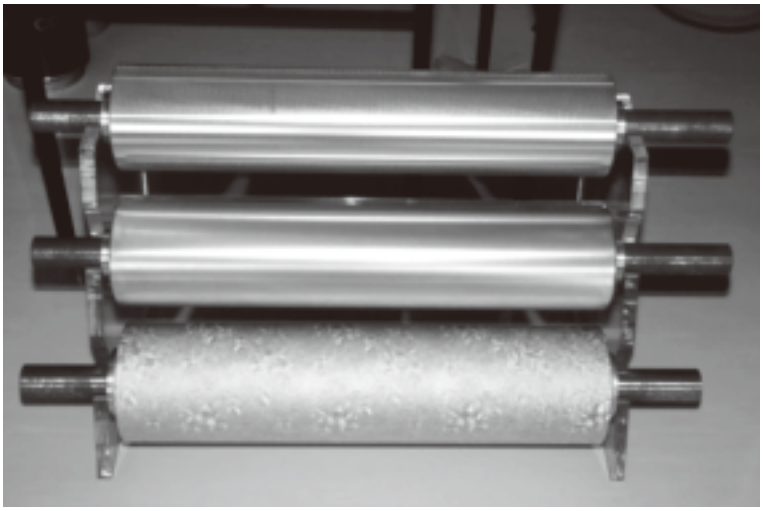
「私どもは金属を扱っていますが、工程としてはCADを使うとか、軽作業があります。足が悪い、手が悪いという意識はしますが、それだから何ということはありません。みなと同じように仕事をしています。職場ではそれぞれ配慮していると思いますが、目立って配慮するということもないですね。本人が意識しているのかどうかはわかりませんが、総じてよくがんばっています」

取締役総務部長の奥村尚武（ひさたけ）さんが、障害者雇用を担当している。

「とくに先代社長はものすごく情があり、従業員の家族のことまでよく知っていて、親父さんという感じでした。足が悪い人は手作業に、前職から手が器用そうだと思えば手作業へ、洋服の仕立てをしていた人は手描きの作業へと配属してきました。たまたま中途採用者ばかりですが、全員の勤続年数は長いですし、みんなまじめで、明るいですね」

現在、障害のある人たちは五人。職場定着推進チームを設置し、奥村さんが職業生活相談員になっているが、〝開店休業状態〟だそうだ。

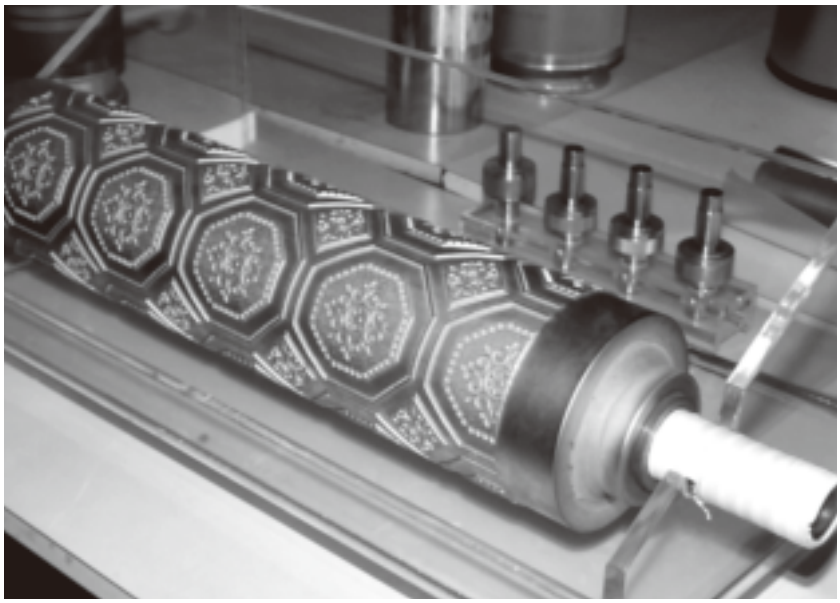
「下肢の悪い人に『工場から近い駐車場に』と話をしたら、『少し離れていた



布地プリント、住宅資材、食品、電子機器部品などあらゆる部門で使われている

布地プリント模様の捺染ロール、クロムやニッケルメッキされている

ほうが運動になっていい』と言われて、そのようにしています。いただいた奨励金で洋式トイレをつくりましたが、障害のある人たちへの特別な配慮はしていません。仕事内容、給料、ボーナス、昇進も変わりません。後輩に技術指導をしている人もいます。社内行事にも全員参加しています。社員旅行の階段の上り下りなどは、足の悪い人をみんなが支えていますが、自然にそうしていますね」

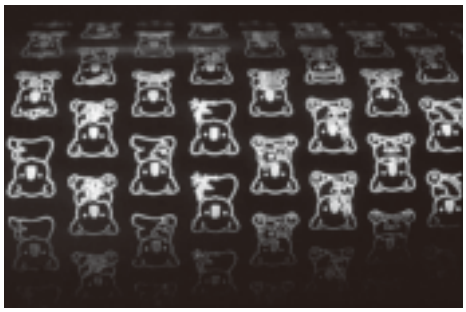


壁紙や天井材、床材、外装材などに、美しい浮き彫り模様を生み出すエンボスロール

最先端の技術の現場で働く

各種ロール製版……のイメージがなかなかつかめず、現物を前にさらに説明していただく。捺染用ロールは、たとえばロール五本で五色の印刷をして、柄を完成させる。立体的なさまざまな模様を彫刻したエンボスロールは、壁紙や天井材、床材などの型押しロールとして広く使われている。さらに、レーザー光線を飛ばして模様を彫刻するフィルム・レスのロータリースクリーン・レーザー彫刻機もある……。

工場の四階。古谷泰成（ふるたにひろしげ）さんは、画像製版部でロールトレスの分色工程を担当している。勤続三〇年。工程は、二〇〇〇年に手描きからデジタル化された。



チョコレート、ビスケットなど食品の模様づけにも

「もともとコンピュータが好きでしたので、それほど苦にはなりませんでしたが、感覚的には違いますね。手描きのときは現物を見て作業をしていましたが、コンピュータではいままで見えなかったところが見えます。現物を見るのと拡大して見るのと違いますから、最初は戸惑いました。むずかしいのは手描きのやわらかさを出すところですが、そこまでまだ達していない感じがします。業界のトップであることは意識していますね」

コンピュータ画面には、花模様が拡大されている。作業を見ながら、奥村さんが解説をしてくれる。

「コンピュータでは、幾何学模様は正確に描けますが、花模様などは造花のようになります。筆で描いたほうが花は花らしく、葉っぱは葉っぱらしく生きてきます。おおよそ六カ月先、いまは来年の春夏ものの布地が動いていますから、どういう柄がはやるかは大体わかります」

駐車場を離れた場所にと注文したのは、古谷さんだ。

「あまり歩く機会がないので、少しでも歩いたほうがいいと思っていますが、ゆっくり歩いて三分から五分ですから、運動量は足りないかもしれません。職場は、働きやすい環境にあると思います」

小山博史（ひろふみ）さんは勤続二三年。新人のこ

デザインされた文様の分色工程で、修正作業をする古谷泰成さん

ろ、ベテランの人の代わりに応援に入り、右手をケガした。画像製版部で分色したフィルムの小さな傷を塗り込む作業に打ち込む。いまの職場に変わって四カ月になる。

「同じ部ですが、工程が違います。小さな模様は、模様か傷かわからないのでたいへんですね。まだコンピュータで処理しきれない、人間の手を加えなければならないところがあります。前の仕事もそうでしたが、職人としての仕事が必要です」

工場の三階では、西隆夫さんがフラットスクリーン製版の作業をしている。パソコンの導入時に、パソコンができる西さんに交代した。耳が不自由だそうだが、コミュニケーションに不自由はない。

「代わって半年です。いまは慣れましたが、まだやったことがない作業もあります。フラットスクリーンの仕組みは、昔の謄写版と同じですね」

安価で加工性に富むフラットスクリーンは、多品種少量生産向き。ファッション個性化の時代に応えている。

中途で障害を負っても職場復帰

高木彫刻には、勤めてから脳出血で倒れ、復職した人が二人いる。

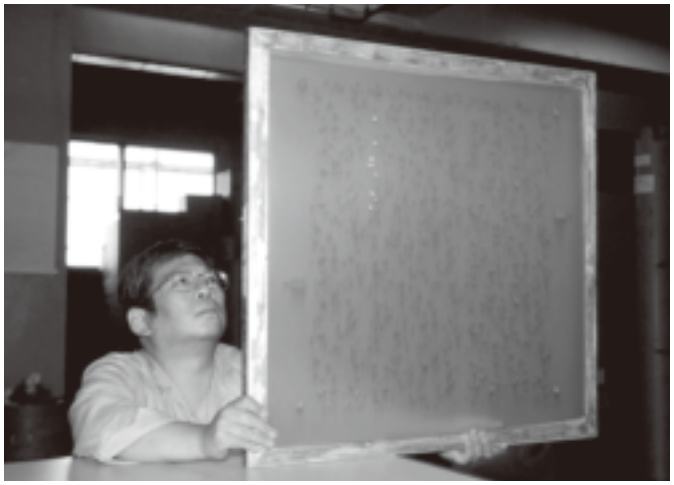
「もちろん、継続して雇用しています。障害をもったからダメだということはありません。社長の方針もあり、できる仕事を見つけています。大上は、仕事がリハビリだと言っていますが、冗談も通じ、明るいですよ」

電鋳工場でロータリースクリーン製版の製造などを担当する大上正芳（おおうえまさよし）さんは、スーパーの店長から転職して一四年。六年前に倒れて、右半身が不自由になった。障害が残っているようには見えないが……。

「戻っているように見えると思いますが、寒くなると筋肉が硬直して動かなくなります。倒れたときは右手右足がほと

版下フィルムの修正。文様の一部かゴミやキズか適切に判断して直す小山博史さん

電鋳部でローラーのメッキ作業に携わる大上正芳さん



フラット彫刻（昔の謄写版と同じ原理のものだという）を担当する西隆夫さんは、入社して36年のベテラン

上司の玉置晴彦画像処理課長（写真左）と打ち合わせながら作業を進める古谷さん

んど動かず、再び仕事ができるようになるとは思いませんでした。いま仕事でたいへんなことはないですね。結構楽しく仕事をしています」

杉原良典さんは勤めて一〇年後、一九九八年に倒れ、六カ月間の入院とリハビリを経て、商事部の元の職場に復帰した。

「以前は海外出張をしていましたが、復帰後は内勤に変わり、海外と国内の両方の業務を扱っています。右半身不随で、復帰して半年から一年は自分の思うように体が動きませんでしたが、左手で書けるようになりました。踏ん張りがきかないので、階段の上り下りや歩くのがたいへんです」

海外営業を担当していた杉原良典さん。7年前、脳内出血で倒れ、その後遺症で右上下肢が不自由になったが、貿易業務の経験を生かして商事部（内勤）で活躍している

杉原さんは、車で通勤している。

「みなさんに気を使っていただいていますが、社長をはじめ、差別はしません。心のバリアフリーというか、開放的でバリアがないのがありがたいですね。四階に洋式トイレをつくってもらい、肉体的なハンディキャップ面をバリアフリーにしてもらって助かっています。仕事は厳しいですが、楽しいですし、やりがいがあります」

自分たちの仕事に誇りを持って

障害のある人たちは全員が四〇代と五〇代のベテランばかりだ。

「これから障害者を採用していかないとと考えています」と奥原さん。再び、高木社長のお話で。

「社員は、自分たちの仕事に誇りを持っているだろうと思います。どこに使われているか細かいところまではわからないでしょうが、自分たちの技術で液晶テレビができているとか、携帯電話に多少でもかかわっているとか、製造者としての楽しみが大きな部分だと思います。世の中に直接製品が出ていないので、知名度がありませんが、できるだけ業界の展示会に出展して、大きなマーケットでやっていきたいと思います」

地元での知名度は抜群、高木彫刻を知らない人はいないそうだ。

「自社だけで研究開発を行うのは限界がありますので、海外も含めて技術的なコラボレーションというか、技術を融合させていくことで、これからも発展していけると考えています。日本人は開発力があります。とくに先端技術は欧米よりもずっと優れていると思いますから、そういう分野をもっともっと伸ばしていきたいと思います」

人情味ある高木社長のお話。世界に誇る技術の数々。日本の中小企業の底力を見たようで、うれしくなった。